The Pragmatics Society of Japan
日本語用論学会
NEWSLETTER
http://www.pragmatics.gr.jp

No.52 / Fall 2024

会　長　秦　かおり
事務局　〒181-8612 東京都三鷹市下連雀 5-4-1　　杏林大学外国語学部　八木橋宏勇研究室内
事務局連絡先 secretary-at-pragmatics.gr.jp
郵便振替口座　00900-3-130378　口座名：日本語用論学会
ゆうちょ銀行口座　記号・番号：00900 - 130378　日本語用論学会
支店番号：099（店名：〇九九）　当座預金　口座番号：0130378　日本語用論学会

語用論研究の新潮流（11）

修辞学再考

小松原哲太（神戸大学）

修辞学は、固有の学術領域として国際的に研究が進められている。主要な論文誌としては *Quarterly Journal of Speech* (the National Communication Association, 1915-), *Rhetorical Society Quarterly* (the Rhetoric Society of America, 1968-), *Rhetoric Review* (Taylor & Francis, 1982-), *Rhetorica* (Johns Hopkins University Press, 1983-), *Philosophy and Rhetoric* (Penn State University Press, 1968-) などがあり、「社会的行為主体が互いの理解、態度、行動に影響を与える上で記号がどのように使われているかの研究」 (Liu and Zhu 2011: 3404) という共通のフレームから、レトリックが多面的に探求されている。

語用論の多様なアプローチのなかには、レトリックに言及しているものがある。その際立った例として、Culpeper (2021: 20) が社会語用論のルーツの 1 つと考える Leech (1983) は「語用論の修辞学的モデル」 (*ibid*., p. 11) を提案した。Leech (1983) の枠組みは、Grice (1975) の「協調の原則」をレトリックの原則の 1 つとして位置づけ、Grice の枠組みを拡張した理論であると言える。また Verschueren (1998: 46) は、論証 (argumentation) の修辞学が語用論の 1 つの形であると述べている。同書は「修辞構造」や「修辞的効果」という用語を広く用いて、語用論的現象の記述を行っている。修辞学の概念を語用論のアプローチのなかに取り込む Leech や Verschueren の方向性は興味深いが、現在に至るまで、語用論には修辞学の総合的知見が十分に反映されているとはいいがたい。

修辞学を語用論に関係づける上で、2 つのアプローチが考えられる（小松原 近刊; Ch. 14）。第 1 の方法は、修辞学の理論を語用論のなかに位置づけるというアプローチである。修辞学の学術的な意味での固有性は、受信者の思考や行動に影響を与え、現実に変化を引き起こす言語使用とは何かを探求することにある。修辞学の観点からみれば「言語形式の選択とはレトリックの選択」 (Hopper 2007: 240) であり、「些細にみえる言語使用のなかにはつねに、そして必然的に語用論的な意義が満ちている」 (*ibid*., p. 249) 。マクロ語用論の 1 つとしての修辞学は、認知、文化、社会にもとづいた、影響力と変化を生み出す言語使用の総合的研究であると言える。修辞学は古くからつづく伝統的な研究分野であるが、現在の文脈からみると、修辞学それ自体が、新しい語用論のアプローチとしての意義をもつものだと言える。

ただ、修辞学のアプローチは、現在のところ言語学の分野で十分に認知されているとは言えず、修辞学者と言語学者のあいだで「修辞学」や「レトリック」という用語が指すものにミスマッチがあることが多い (Liu and Zhu 2011: 3405-

3406) 。そのようなミスマッチにもとづく批判として、Sperber and Wilson (2012 [1990]) は、修辞学は「80 世代の教師が 80 世代の生徒に同じ内容を説き聞かせて」 (*ibid*., p. 84) きて、古代から「根本的には何も進展していない」 (*ibid*.) と述べている。このような理解のミスマッチは、語用論のなかで修辞学が適切に評価されてこなかった原因の 1 つだと思われる。

第 2 の方法は、文彩を語用論の研究対象として位置づけ、その修辞的効果を分析することで修辞学全体につなげるというアプローチである。興味深いことに、修辞学を厳しく批判する論者も、修辞学が対象としてきた「文彩がもたらす効果の豊かさと重要性」 (Sperber and Wilson 2012 [1990]: 85) は認めている。特に隠喩（メタファー）は、修辞学のトピックのなかで別格の地位をもつ。隠喩の重要性は言語学、心理学などで認識されており、多数のモノグラフやハンドブックに加え、*Metaphor and Symbol* (Taylor & Francis) 、*Metaphor and the Social World* (John Benjamins) などの論文誌で、活発に研究されている。認知言語学以後の隠喩研究は、単なる言葉の綾という捉え方を超えて、言語を支える思考と概念体系の基盤として捉えられ、さらにコミュニケーションのなかでの隠喩の使用とその機能の研究 (Cameron 2011, Charteris-Black 2018) に発展した。そして、この隠喩研究の発展の道筋は、他の文彩にも開かれている。必要なのは、個別の文彩が語用論の対象としていかに重要で、学術的興味を引くものであるかが理解され、認知されることである。これは、修辞学全体の理解を普及するよりも容易であると思う。

狭い意味でのレトリック、すなわち隠喩などの文彩 (figurative language) を特別視する修辞学の問題は、そのような研究がしばしば、文彩をコンテクストから切り離して、分類整理するだけに終わってしまうという点にある (Perelman and Olbrechts-Tyteca 1969: 171) 。文彩は「通常の方法」よりもむだなく魅力的に、ある特徴や論点に受信者の注意を引きつけることができる。しかし、言語表現が「通常の方法」にしたがっているかどうかは、コミュニケーションの環境と前後文脈によって決まる (*ibid*.) ので、ある表現が文彩として成立するかどうかを事前に決めることはできない (*ibid*., p. 169-170) 。この言語使用のコンテクストに依存した文彩の特性と機能は、「コンテクストにおける言語使用の研究」 (Huang 2013: 1) である語用論のテーマであると言える。

修辞学が追求してきた独自の言語現象は文彩である。修辞学の研究範囲を文彩だけに限定する必要はないが、修辞学の文彩研究は、語用論のなかで追求する価値のあるテーマの膨大な蓄積であると言える。

参考文献

Cameron, Lynne. (2011) *Metaphor and Reconciliation: the Discourse Dynamics of Empathy in Post-Conflict Conversations.* London: Routledge.

Charteris-Black, Jonathan. (2018) *Analysing Political Speeches: Rhetoric, Discourse and Metaphor*. 2nd edition. London: Palgrave.

Culpeper, Jonathan. (2021) Sociopragmatics: Roots and Definition. In Michael Haugh, Dániel Z. Kádár, and Marina Terkourafi (eds.) *The Cambridge Handbook of Sociopragmatics*, pp.15--29. Cambridge University Press.

Grice, H. Paul. (1975) Logic and Conversation. In Peter Cole and Jerry L. Morgan (eds.) *Syntax and Semantics Volume 3: Speech Acts*, pp.41--58. New York: Academic Press.

Hopper, Paul J. (2007) Linguistics and Micro-Rhetoric: a Twenty-First Century Encounter. *Journal of English Linguistics* 35(3): 236--252.

Huang, Yan. (2017) Introduction: What Is Pragmatics? In Yan Huang (ed.) *The Oxford Handbook of Pragmatics*, pp.1--18. Oxford: Oxford University Press.

Leech, Geoffrey N. (1983) *Principles of Pragmatics*. London: Longman.

Liu, Yameng, and Chunshen Zhu. (2011) Rhetoric as the Antistrophos of Pragmatics: Toward a ‘Competition of Cooperation’ in the Study of Language Use. *Journal of Pragmatics* 43(14): 3403--3415.

Perelman, Chaïm, and Lucie Olbrechts-Tyteca. (1969) *The New Rhetoric: A Treatise on Argumentation*. Notre Dame: University of Notre Dame Press.

Sperber, Dan, and Deirdre Wilson. (2012 [1990]) Rhetoric and Relevance. In Deirdre Wilson and Dan Sperber (eds.) *Meaning and Relevance*, pp.84--96. Cambridge: Cambridge University Press.

Verschueren, Jef. (1999) *Understanding Pragmatics*. London: Arnold.

小松原哲太（近刊）『概説レトリック―表現効果の言語科学』ひつじ書房

＊＊PSJ27（第 27 回大会）ご案内＊＊

2024 年度の第 27 回大会は、対面方式を基本としつつ、一部のプログラムはオンラインでも配信する形式で開催いたします。今回も、多くの会員の皆様から研究発表のご応募をいただき、

ワークショップ 4 件、口頭発表 33 件（うち、慫慂発表 4 件）、ポスター発表 8 件が採択となりました。詳細は、会員メーリングリスト、学会ウェブサイトにて随時お知らせいたします。

◆ 日時：11 月 30 日(土)、12 月 1 日(日)
◆ 場所：大阪大学大学院人文研究科
（豊中キャンパス）
〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町 1-8
（大阪大学大学院人文学研究科共催）

※大会に参加するには、事前参加登録が必須となります。詳細は学会ウェブサイト・ML でお知らせしますが、期間内に事前参加登録（参加費納入を含む）をお願いいたします。
◆ 参加費（事前参加登録のみ）：
会員（一般・団体）：2,000 円
会員（大学院生）：1,000 円
会員（学部生）：無料
非会員（一般・団体）：3,000 円
非会員（大学院生）：2,000 円
非会員（学部生）：無料
※ オンラインで参加される場合、事前参加登録をした方に Zoom 情報をお知らせいたします。
※ 会場で参加費の支払いはできません。必ず事前に納入を済ませてください。

◆ 懇親会費：先着 100 名まで受付（事前参加登録を推奨）
会員（一般・団体）・非会員：4,000 円
大学院生（会員・非会員）：3,000 円
学部生（会員・非会員）：無料
※ 会場の収容可能人数に限りがございますので、なるべく事前申込をお願いいたします。

◆ 大会テーマ
「語用論、日本語学、逸脱」

◆ プログラム（予定）
≪11 月 30 日（土）≫
午前：特別講義・ワークショップ
午後：口頭発表①（慫慂発表を含む）・
ポスター発表・総会・大会発表賞表彰式・基調講演・懇親会

≪12 月 1 日（日）≫
午前：口頭発表②・会長就任講演・語用論茶寮（昼休み）
午後：口頭発表③（慫慂発表を含む）・シンポジウム・閉会式

【特別講義】
“The complexities and dynamics of pragmatics of sharing on social media”
Prof. Wei REN (Beihang University)

【基調講演】
「翻訳話体と小説：村上春樹作品を例に」
金水敏先生（放送大学大阪学習センター所長・大阪大学名誉教授）

【会長就任講演】
「語用論のコアとペリフェラル：語用論はどのように応用／援用されるのか」
秦かおり（日本語用論学会会長・大阪大学大学院人文学研究科教授）

【シンポジウム】
テーマ：
言語コミュニケーションのなかの逸脱と創造性
第一部：逸脱表現はなぜ生じ、どのように使われるのか？
第二部：逸脱表現研究の言語学的な意義は何か？
講演者：
天野みどり先生（大妻女子大学）
野田春美先生（神戸学院大学）
泉大輔先生（立教大学）

趣旨・発表内容など、詳細は、決定次第お知らせいたします。

【語用論茶寮】
テーマ：研究会の作り方、育て方、楽しみ方

講演者：
高田博行先生（HiSoPra*研究会）
西村綾夏先生・菊地礼先生（デジタルコミュニケーション研究会）

趣旨：本当に建設的なディスカッションができて、帰属感のある研究コミュニティを作り出すためには。研究会の成り立ち、立ち上げの経緯、メンバー集め、活動などについてご報告いただく。

【オンライン配信について】
すべてのプログラムは対面で行われますが、特別講義・基調講演・会長就任講演・慫慂発表（海外枠）・シンポジウムはオンラインでも配信いたします。

【発表賞について】
例年の通常開催と同様、口頭発表、ポスター発表において事前に発表賞の審査を受けることを申告している発表者が対象となります。

◆ No Show に対する措置
発表が採択されたにもかかわらず、大会当日に大会発表委員会に無断で発表を行わない場合やポスターの掲示のみで説明を行わない場合は、これらを「No Show」とみなし、学会ウェブサイトにて公表します。ただし、事前、または、当日に（やむをえない場合には事後に）、発表を行えない（行えなかった）合理的な事情の説明がある場合には、「キャンセルされた発表」とします。

◆ 第 27 回大会会場・大阪大学（豊中キャンパス）への交通・宿泊について
〔大会会場について〕
会場：〒560-0043　豊中市待兼山町 1-8
大阪大学大学院人文学研究科
（豊中キャンパス）
最寄駅・所要時間：阪急電車宝塚線 「石橋阪大前」駅（急行停車）下車　東へ徒歩約 15 分
または、大阪モノレール 「柴原阪大前」駅下車　西へ徒歩約 10 分

アクセス情報：https://www.hmt.osaka-u.ac.jp/infomations/access/
［宿泊について］
近辺にはあまり宿泊施設はございません。
梅田などが便利です。

＊＊委員会・事務局より＊＊

★『語用論研究』編集委員会より

本年は 4 月に『語用論研究』のオンライン化第一号（第 25 号）を J-STAGE 上で公刊いたしました。（学会ホームページ上では以下で公開されております：https://pragmatics.gr.jp/journal/backnumbers/25.html ）。
また、「投稿規定・スタイルシート」のウェブサイトを更新し、スタイルシートの末尾に「査読規定」も付けました（https://pragmatics.gr.jp/journal/contribution_rule.html ）。
現在第 26 号の J-STAGE 上刊行を目指して、８本の投稿論文の査読が行われております。この他にも招待論文 1 本ないし 2 本、書評数本の掲載が予定されております。
今回はやや投稿論文が少なかったですが、これは年によって多少の増減があるものと思います。また、投稿論文のテーマとしては近年（広義の）「談話（会話）」研究に属するものが多い傾向があります。一方で、（一例として）発話行為、（イン）ポライトネス、歴史語用論、関連性理論、対照語用論、認知語用論、実験語用論、文法と語用論のインターフェイスといった語用論の研究領域内の他のテーマの投稿がやや少ないように思われます。
語用論学会には様々な研究領域の研究者の方々がいらっしゃいます。編集委員会は現在委員長、2 名の副委員長、14 名の編集委員で、様々な語用論の研究領域からの投稿に対応できる体制を取っております。会員のみなさまには、奮ってオリジナルな研究成果をご投稿いただけますようお待ちいたしております。
（編集委員長　堀江薫）

★大会総務委員会プロシーディングズ担当より

日本語用論学会では、2005 年度第 8 回大会より『大会発表論文集』(Proceedings) を発行しておりますが、2023 年度第 26 回大会の論文集（第 19 号）は、本年 7 月に学会のホームページで公開されました。
以下、掲載された論文数をご報告いたします。

シンポジウム発表	3 本
ワークショップ発表	8 本
研究発表（日本語）	22 本
研究発表（英語）	1 本
ポスター発表（日本語）	4 本

合計で 38 本が掲載されました。

原稿をご提出いただいた会員の方々には、ご協力いただき誠にありがとうございました。

＊なお、プロシーディングズ「編集後記」では、ポスター発表件数が抜けておりました。ここに深くお詫び申し上げますとともに、上述の掲載

論文数を最新のものとご理解いただけましたら幸いです。

（中馬隼人・竹田らら）

《事務局より》

★会費納入のお願い

年会費は、一般会員 6,000 円、学生会員 4,000 円、団体会員 7,000 円です。よろしくお願い申し上げます。学会口座は以下のとおりです。

【郵便振替】
口座番号：00900-3-130378
口座名：日本語用論学会
【ゆうちょ銀行】
支店名：099
口座種類：当座
口座番号：130378
口座名：日本語用論学会

学会ホームページの「会員専用ページ」より、クレジットカード決済も可能です。会員ステータス、会費納入、会員専用ページへのログイン等に関するお問い合わせは、事務局ではなく、下記までお願いいたします。

日本語用論学会 会員管理室
E-mail: psj-at-outreach.jp

★令和 3 年以降の激甚災害ならびに新型コロナウイルスによる影響を受けられた皆様へ

日本語用論学会では、激甚災害に指定された豪雨等の被害に遭われた会員の皆様に対し、お申し出いただくことにより当該年度の会費ならびに当該年度年次大会の参加費を免除いたします。被災された皆様方の一日も早い復興を心からお祈り申し上げます。

また、「新型コロナウイルス感染症」の直接・間接的影響による著しい経済的な影響を被っている会員の皆様におかれましては、以下の連絡先にまずはご相談ください。

日本語用論学会事務局
〒181-8612
東京都三鷹市下連雀 5-4-1
杏林大学外国語学部
八木橋宏勇研究室内
E-mail: secretary-at-pragmatics.gr.jp

（事務局長・八木橋宏勇）

★《新刊・近刊案内》★

■『メディア談話へのまなざし：クロスモーダル分析の試み』片岡邦好（著）ひつじ書房（定価 3,400 円＋税）

テレビ・ラジオ・新聞といったメディアにより配信されたコマーシャル、演説、報道・論説、国会中継などの「メディア談話」は、そこに含まれる情報の質やその伝達媒体、配信される言語的／身体的／空間的テクストとその配信への各参与者の関わり方など、様々なレベルで複層化しており、従来はそれらの各レベル／層がそれぞれ異なる分野において扱われてきた。本書は、そうしたメディア談話を巡る多様な分析方法と理論を有機的に統合し、出来事を構成する認知的かつミクロな相互行為の実態だけでなく、その背景にある文化的・社会的規範や言語イデオロギーの影響をも包括的に捉える「クロスモーダル分析」によって、メディア談話分析の新たな可能性を探る画期的な内容となっている。クロスモーダル分析アプローチによる具体的な研究例も収録されており、近年盛んに行われている SNS やインターネットメディアにおける談話の研究に携わる研究者には必読の一冊としてお勧めしたい。（2024.5.24 刊）

■『インタラクションと対話：多角的な視点から研究方法を探る』谷村緑、仲本康一郎、吉田悦子（編）開拓社（定価 3,520 円＋税）

本書は、相互行為における「基盤化」のプロセスについて、二者が与えられた課題を達成する際の対話データを用いて論じている。このデータの対話参加者は、日本語・英語の母語話者や日本人の英語学習者などのペアである。参与者ペアはレゴのブロック模型を組み立てる作業を、いくつかの条件を設けて実施した。同条件で異なる参与者の相互行為を収集したデータで、日英対照が可能なほか、様々な分析方法でアプローチできる豊かなコーパスデータである。本書は、9

章で構成され、データ概要が丁寧に説明された 1 章は、研究手法を学ぶのにも役に立つだろう。2 章以降では基盤化について、発話連鎖、インタラクション、概念化とともに検討されている章が続き、言語教育の現場へも応用でき、また学際性を増す最新の研究の知見を得ることもできる、データに基づく具体的な分析結果を提示している。途中には、基本概念や用語の解説や、ツールの紹介をするコラムも設けられており、書全体として、非常に充実した良書である。(2024.6.21 刊)

■『レトリックの世界 1 レトリック探究』瀬戸賢一（著）ひつじ書房（定価 3,200 円＋税）

メタファーの新しい見方と取り組みがはじまってほぼ半世紀になるが、この間のレトリック研究は言語事実の着実な積み重ねによって提示されたものなのだろうか。メタファーに対するシミリーの不当な扱い、シネクドキとメトニミーの混同などを見ていると、実例をよく観察して得られる結論とは言いがたいものが混ざってはいまいか。本書に通底するのはこのような問題意識であろう。全 3 巻本の第 1 巻となる本書では、これまでの通説と一定の距離を置きながら、ことばのあやの確かな定義と、それぞれのあやの独自性、創造性の説明を試みる。比喩をふんだんに用いた文体は、豊富に挙げられる実例の魅力とも相まって上質なエッセイを読んでいるかのようだ。だからといって理論的説明を怠っているわけではない。実例重視という姿勢を揺るがさず、人間論としてのレトリック研究の見通しも力強く打ち出されている。（2024.8.9　刊）

■『ポライトネス理論』宇佐美まゆみ（著）大修館書店（定価 4,000 円+税）

本書は、大きく 2 つの構成から成る。前半では、ブラウンとレヴィンソンのポライトネス理論を中心に、ポライトネス研究の変遷と課題について徹底した解説が展開される。これまであまり取り上げられることのなかった、ブラウンとレヴィンソンが意識していたという社会学や言語研究への示唆は、ポライトネス理論が関連分野へ広く適用され得ることを示すものであり、対人コミュニケーションに関心のある全ての読者にとって、自身の研究と何かしら通ずるところが見つかるに違いない。また、著者が言及しているように、社会学や言語研究まで意識した先見的な理論が約半世紀前に提案されていることに驚きを覚えるとともに、ポライトネス理論に対する認識を改める読者も多いと思われる。本書の後半では、著者の提案するディスコース・ポライトネス (DP) 理論について、理論が生まれるまでの背景から、最新の理論の全体像、研究への適用方法、今後の展開に至るまでが網羅されている。皆さんのポライトネス理論の知識、そろそろアップデートしませんか？（2024.8.23 刊）

■『改訂版　グローバル社会のコミュニケーション学入門』藤巻光浩・宮崎新（編）ひつじ書房（定価 2,200 円＋税）

本書は、多様化したコミュニケーション学を身近なエピソードで学べる教科書である。内容は大きく五つの部分に分かれ、外国語教育と異文化接触、規範、対人関係、市民参加とコミュニケーションなどに関するトピックが取り上げられている。最後に、コミュニケーション学を学ぶ意義について論じられている。各セクションの冒頭では、日常生活で起こりうるエピソードとそこから生じた問題点が提示されている。その問題点について考えることを通して、基礎的な理論や概念の学びにつながる。読者は、エピソードを通して疑問に思ったことを理論的に分析するために必要な概念を学び、コミュニケーションにおける様々な現象を客観的に理解できるようになる。特に、「当たり前」だと思われることが多文化社会において様々な捉え方があることを体感でき、個人のアイデンティティと他者との関係性を再考する機会が与えられる。改訂版では、変化し続けるコミュニケーションのあり方を深く議論するために、ソーシャル・メディア、医療

通訳、AI などに関する議論が取り入れられている。授業のテキストとしても、個人で学習する際の資料としても活用できる一冊である。（2024.9.24　改訂版刊）

■『談話標識へのアプローチ：研究分野・方法論・分析例』　小野寺典子（著）ひつじ書房（定価 2,800 円＋税）

本書の内容は、談話分析、会話分析、語用論、意味論など、近年複数のアプローチによって研究されている談話標識について、現代語会話の共時的分析、またその成り立ちや発達に関する通時的分析の両方を解説しつつ、そうした研究の発展・拡がりに起因する用語の使い方やアプローチの選択等に関する混乱の解消を試みるものである。本書では、談話標識が、それに後続する部分の理解を助けるフレームを与え、話し手と聞き手の双方にとって談話の流れを掴むための交通標識となると述べているが、本書の内容や構成も同様に、談話標識研究や談話分析におけるこれまでの傾向・問題点・注目すべき点などをわかりやすく整理し、現在までの潮流を掴むための交通標識となることだろう。これから同分野に着手しようと考えている学生・研究者には、ぜひとも最初に手に取ってほしい参考文献としてお勧めの一冊となっている。（2024.9.24 刊）

■シリーズ〈ことばの認知科学〉 第 1 巻『ことばのやりとり』辻幸夫・菅井三実・佐治伸郎（編）朝倉書店（定価 3,200 円＋税）

シリーズ〈ことばの認知科学〉と題して、『ことばのやりとり』『ことばと心身』『社会の中のことば』『ことばと学び』の全 4 巻が一挙に刊行された。各巻とも 8 つのチャプターから成り、言語と認知科学に関わる多様な主題やアプローチを網羅している。特に第 1 巻である本書『ことばのやりとり』には「意図理解」「非言語コミュニケーション」「会話分析」「社会的ロボティクス」「言語社会化」「カウンセリング」「暗黙知」など語用論やコミュニケーション一般にまつわるキーワードを扱う章が集められており、多くの本学会会員の興味を引き付けるだろう。各章では専門的研究についての現在までの知見と今後の展望が、読み易い文体と構成で概観されており、学部生（あるいは意欲的な高校生）がこれらの分野に入門するためのテキストとしても、大学院生ならびに研究者が自分にとっての隣接領域について知見を広げるための参考書としても、重宝する一冊である。なお、本書以外の 3 つの巻にも語用論に関わる記述は数多く散りばめられており、ご関心の向きにはシリーズ全体を手に取られることをおすすめしたい。（2024.10.1 刊）

★広報委員会からのお知らせ

会員諸氏に広くお知らせしたいと思いますので、語用論関連の新刊書・近刊書の情報があれば広報委員会宛にお寄せください。ご自身の著作はもちろん、恩師・同僚・友人・指導学生の出版物、比較的目にとまりにくい日英語以外での出版物なども歓迎します。なお、紹介文は出版社によるものを利用するほか、広報委員が執筆を担当しています。

PSJ members selected this section's recently-published and forthcoming books on pragmatics. We invite you to introduce books you recently published or highly recommend, to fellow members. Little-known books, and books written in your native language are especially welcome.

～編集後記～

■年に一度の大会が近づいてきました。多くの皆様と大阪大学でお目にかかり、語用論談議に花を咲かせることができるのを楽しみにしております。国内外の語用論研究はますます活性化し、網羅的に追いかけるのも大変になっていますが、本学会ニューズレターの「語用論研究の新潮流」や「新刊・近刊案内」が皆様の良き案内役として働くことを目指して作成しております。ニューズレターも語用論学会も引き続きご愛顧のほどよろしくお願いいたします。

（横森大輔）

■まだ、気温が不安定な日もありますが、夏は終わり秋の良い季節が到来しました。全国各地で学会の全国大会が開催され、研究者たちが充実した時間を過ごせる季節でもあります。また、本ニューズレターの新刊・近刊コーナーに収まりきらない良書が次々と出版されており、学術的な盛り上がりが続くことはうれしい限りです。今後も、語用論や関連分野の活発な動きを大切

にし、充実した学術交流の場を皆様と共有したいと改めて思います。

（野村佑子）

■10 月に入っても気温の乱高下が続いていましたが、最近ようやく秋らしくなってきました。今年の大会は大阪にて開催されます。大阪といえば食いだおれ。秋の学会は食欲と知的好奇心を同時に満たす絶好の機会です。コロナ禍の混乱が遠い昔の事のように感じられるくらい日常が戻り、学会そのものだけでなく移動や人との交流、食などをフルで楽しめることを嬉しく思います。紅葉もきれいな季節。五感を使って大阪を堪能しましょう。みなさまと会場でお会いできることを楽しみにしております。

（工藤貴恵）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～

日本語用論学会 Newsletter 第 52 号
発行：日本語用論学会広報委員会
発行日：2024 年 11 月 1 日
［広報委員会］
＊　委員長：横森大輔
＊　Newsletter 編集担当：
＊　野村佑子・工藤貴恵
＊　公式ホームページ担当：
名塩征史・李頌雅
＊　会員メーリングリスト担当：
木本幸憲・盛田有貴
E-mail: webmaster-at-pragmatics.gr.jp